

看護大学生の口腔ケアについての認識・自己管理行動 および臨地実習での体験—2020年度調査

桑村由美 岸田佐智

徳島大学大学院医歯薬学研究部女性の健康支援看護学分野

1. はじめに

口腔の状態は全身の健康と密接に関係¹⁾し、会話や食事など生活の質にも影響するため、口腔ケアは重要な看護援助の1つである。看護教育の中での口腔ケア教育の改善に向けて2015年度より看護大学生の口腔ケアについての認識や臨地実習での体験についての調査²⁾⁻⁴⁾を継続している。

本研究の目的は2020年度調査における看護大学生の口腔ケアについての認識・自己管理行動および臨地実習での体験の実態から、教育への示唆を得ることである。

2. 方法

1) 対象

4年制大学での看護師養成のための看護基礎教育課程に在学中の4年次学生を対象とした。

2) 調査方法

4年間の総まとめの最後の臨地実習である看護統合実習終了時の2020年7月に自記式質問紙調査を実施した。

3) 調査項目

調査用紙は、これまでの研究²⁾⁻⁴⁾で使用したものをを用いた。具体的な調査項目は、自己の口腔への自己管理行動の実施状況、口腔や口腔ケアへの関心および臨地実習での口腔ケアの体験等についてである。臨地実習での体験は、「看護師や教員の指導のもと実施」「見学」「実施も見学も行っていない」の3段階で自己評価を行った。さらに口腔ケアの取組の自己評価とその理由、口腔ケア教育についての満足度や看護師と歯科専門職者

との協働場面の見学の有無などについても尋ねた。自己管理行動、知識、関心、臨地実習での体験はスコア化し合計点を算出した。

4) 分析方法

個人属性や各変数の記述統計量の算出を行い、2つの変数の差の検定にはMann-Whitney検定を用い、有意水準は5%とした。統計解析ソフトはIBM SPSS 25.0 for Windowsを用いた。

5) 倫理的配慮

本研究への参加は自由意思とし、参加の有無により学習や成績評価に何ら不利益を生じないこと、無記名での実施で、集計結果は統計学的に処理を行い個人が特定されないように配慮することなどを口頭および文書で説明を行った。なお、本研究は徳島大学病院医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号2329-5)。

3. 結果

35名(年齢22.5 ± 4.2才)より協力が得られた(回収率55%)。口腔内の自己管理状況は、歯と歯肉の間の歯磨きは33名(94%)、口腔内の観察は25名(71%)であった(図1)。14名(40%)が自分の歯の本数を知っていると答えた。臨地実習での口腔ケアの体験では、口腔内の観察15名(43%)や義歯の清掃12名(34%)を指導の下で実施していた(図2)。臨地実習での口腔ケアへの取組の自己評価は、積極的1名(3%)、やや積極的21名(62%)、やや消極的11名(32%)、消極的1名(3%)であった。消極的と評価した12名の理由は、実習時間内に口腔ケアを実施していなかった(11名)、口腔ケアの自

信がなかった(11名)であった。口腔ケア教育への満足群は不満足群と比べ自分の口腔への関心が高かった ($p = 0.043$)。歯科医師/歯科衛生士の治療/ケア場面の見学は 24 名(69%)/25 名(71%)、看護師と歯科医師/歯科衛生士との情報共有場面の見学は 11 名(31%)/ 14 名(40%)で看護師と歯科医師/歯科衛生士との情報共有場面を見学した学生は臨地実習での口腔ケアの体験が有意に多かった ($p = 0.016/ 0.019$)。

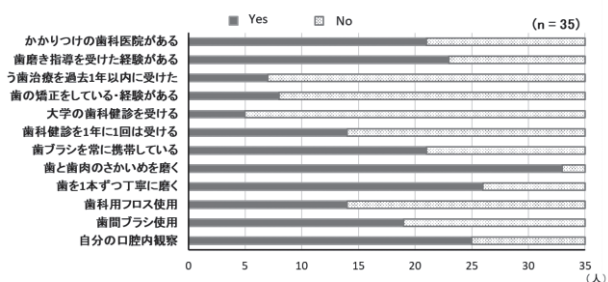


図1 口腔内の自己管理状況

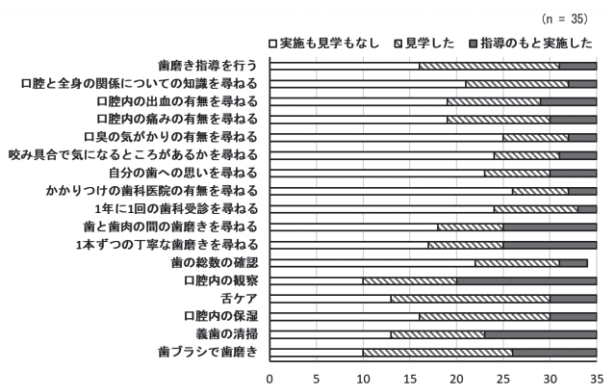


図2 これまでの臨地実習での口腔ケアの体験

4. 考察

調査に協力の得られた学生の 94%が歯と歯肉の間を磨くなど、口腔内の自己管理に積極的に取り組んでいた。臨地実習での体験内容は義歯の清掃や歯ブラシでの歯磨き等に加えて口腔内の観察の割合も高かったが、歯の総数の確認や自覚症状、自己管理行動の実施状況についての確認は少なかった。これらのことから、日常生活の中のアセスメント項目の1つとしての位置づけが少ないと考える。一方で、看護師が歯科専門職者と情報共有している場面を見学した学生の口腔ケアの体験が多かったことから、学生は看護師が歯科専門職者と協働している状況を見学することにより、看護師の視点で口腔ケアを具体的に捉える

ことができ、意識的に口腔ケアに取り組むことができたのではないかと考える。なお、2020年度の看護統合実習は新型コロナウイルス感染症への十分な感染防止措置を講じた上での実施であったため、3年次までの臨地実習を想起して回答した学生が多かったのではないかと推測する。梅津ら⁵⁾は口腔ケア実施時には、湿性生体物質が飛散するため、手袋、フェイスシールド、マスクなどの標準予防策の必要性を報告している。看護学生への口腔ケア教育に関して、口腔ケア教育の標準化の必要性⁶⁾も提案されている。学生が口腔への関心や意識を高めることができ、看護援助に結び付けることができる教育支援が必要である。With コロナの状況下で、これからの口腔ケア教育の在り方を再検討する必要性が示唆された。

5. 引用文献

- 1) 湯本浩通:口腔 Biofilm 感染症における病原因子と全身に及ぼす影響. Journal of Oral Health and Biosciences, 31(1), 1-12, 2018.
- 2) 桑村由美, 岸田佐智:看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の実態. 平成 28 年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島, 12-13, 2016.
- 3) 桑村由美, 岸田佐智:看護大学生の臨地実習における口腔ケアに関する実践内容の経年比較. 平成 29 年度全学FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島, 16-17, 2017.
- 4) 桑村由美, 岸田佐智, 他:看護大学生の臨地実習における口腔ケア体験の自己評価と口腔ケア教育への満足度の実態調査. 日本看護研究学会雑誌, 43(3), 409, 2020.
- 5) 梅津敦士, 三橋睦子:口腔ケア時の洗浄液の飛散状況および口腔環境調査. 日本環境感染学会誌, 32(4), 186-192, 2017.
- 6) Haresaku S, et al: Effect of educational environments on nursing faculty members' perceptions regarding oral care. Jpn J Nurs Sci, 16, 364-372, 2019.